

## 簡単そうに見えて凄い技術です

服部商店には色々な樹種のレパトリーが有ります。特に取り扱い樹種の中で広葉樹に特徴の有る店だと小生は思います。しかし色々な樹種を扱う事はリスクを凄く伴う作業です。そのリスクの一番は良い原木が何時手に入るか解からない事です。具体的に言えば広葉樹原木の一番理想的な仕入れシーズンは11月～2月です。この時期に入手し製材をすぐに行いすぐ乾燥の作業つまり干し上げれば大抵の広葉樹の板は美しく乾燥が出来ます。しかしこんな理想な事を言っても良質材が入手出来る時期が数ヶ月遅れたら普通に製材し普通に管理業務をすると折角の無垢の木材資源を台無しにしてしまいます。

具体的に言いますと4月の旭川にて開催された第345回銘木市にて今シーズン初めてロシア産シナ原木を入手できたのですが、1月・2月と同じ様に管理業務をしていたら全く良い製材品になりません。其れはロシア産シナ原木の特徴に有ります。ロシア産は日本産シナ原木より目が細かく少し原木も太いです。と言う事は高品質の商品なのです。しかし一つ大きなリスクが有ります。それは日本産より寒い場所に木が存在する為に多くの水分を含んでいるのです。製材する時、鋸と原木が接触するとき、原木から水がほとぼしる様に零れることで解ります。実に多くの水分を多く含んでいるのです。これは特徴であり、決して欠点では有りません。欠点ではないけれどリスクなのです。そのリスクを上手く回避する必要があるのです。それが工夫です。服部商店ではロシア産シナ原木の乾燥方法は立て乾燥と言う技術を駆使しています。凄く手間の掛かる作業ですが、服部商店の材は皆様から見た目の単価は少し高いように見えるが、使ってみれば凄く使いやすいと高い評判を頂いています。それは次の哲学から来ているのです。価格競争より品質競争をするのが材木屋の仕事『神様の授かり物の無垢と言う最高の素材を扱える事に感謝してより良い商品を提供するのが責務である』で有ると言う事です。



ロシア産シナの板を立て乾燥している



水がほとぼしる様に木口から出て下の板に吸い込まれる

4月の旭川の銘木市にて入手出来たバッコヤナギ原木を製材して乾燥の為に干した姿ですが、斜めに干した姿が解ると思います。これは関東のお客様の注文品です。なんとかカビが入らず、アオも入らず乾燥出来ないかと頼まれ、こう言う姿で板を干しました。バッコヤナギの場合シナと同様にすれば良いのではと思われるかも知れませんが、そうは出来ないので。これはお客様に対する守秘義務も有り服部商店の持っているノウハウ『木に合わせた乾燥方法が有る』が服部商店の稼ぎの技術だからです。



## 四国行脚

5月10日に四国の得意先と知り合いの材木屋さん合計3社を訪問させて頂きました。その訪問の目的は小生の材木屋として新しい目標構築する事でした。逆に言うと目標を失いかけていたのです。私の会社は祖父の時代から数えて今年で83年目になりますが、木材の仕入れの困窮ばかりで頭が一杯で、お客様目線が大変不足していると指導・指摘されているのがきっかけです。お客様目線を考えるには普通の仕事で北海道に仕入れに出掛けたり、会社で仕事をするだけでは全く答えのヒントも沸きません。それで外の空気を味わいに出掛けました。

最初に徳島県の工房によさせて頂きました。1度商い(タモの板を以前買っていました)をさせて頂きました。ここでは設備投資に多くのお金をかけずにする方法のヒントを学びました。すぐ実行は出来ませんが何らかのヒントは教えて頂きました。次に高松に本社機能が有る大手家具メーカー様を訪問させて頂きました。この社長には凄くお世話になり特別のお付き合い『販売も仕入れもさせて頂き家族同士のお付き合いもさせて頂いています』をさせて頂いております。ここでのお話は家具屋と言う形態の商いから少しずつ商いの形が変りつつあると言うお話でした。ある大手のスーパーから大量の商品の注文を受けているのですが、今までだったら元請は他の問屋みたいな所が中枢になって、仕事分担の作業、つまりこの仕事はこの木工所、この仕事はこの木工所としていたのが、私の得意先の家具メーカーが中枢になり、各木工所の得意分野を精査し仕事を分担しているのです。何故こう言う話になったのか正確なお話は守秘義務が有るみたいでお聞き出来ませんでした。お聞きしたのは、非常に受ける価格の安さだと感じました。大手のスーパーが東日本の大震災で相当の被害を被っていること、私でも解ります。非常事態の時に今までどおりに仕事を出していたら幾らお金が有っても足りないと思います。自然とこう言うスマートな形になったと思います。木工所はおのこの技術レベル・工場の生産能力等の事は問屋より解っています。餅は餅屋が有るのだと感じました。

最後に愛媛県に有る米材を製材している有名な製材所を訪問させて頂きました。その社長は私より12歳上の同じ犬年です。血液型はA型の凄く真面目な社長です。ちなみに私はB型です。

そこでは現在の本州側の松山港の全般のお話と関西の原木問屋のお話を承りました。ここで聞いたお話『問屋さんと材木屋との駆け引きの話です。具体的には書けません凄く為になりました。掻い摘んで書ける所だけ言いますと材木屋の常識は世間の常識とは少し違うと言う昔ながらの論法は通用しない』は、お客様目線のヒントにはなりました。

又松山の港のお話(裏話も含む)もお聞きし港も案内して頂きました。ありがとうございます。

この材木屋さんの社長の趣味はハーレーダビットソンに乗ることだとお聞きしました。どうぞ安全運転で事故が無い様に祈っています。



## 正しかった服部商店の技術

衝撃的な出会いで有ったと思います。5月の末に滋賀県に研究所をお持ちになっている京都大学の元教授の野村隆也様から夕方お電話を頂きました。そして電話機を通じて約15分お話をさせて頂きましたが、直ぐに先生の研究室に行きたいと直感で思いました。そして6月3日の午前10時にアポイントを取らせて頂き滋賀県湖南市の研究所を訪問させて頂きました。

まず驚いたのは、先生の研究所の内装が全て無垢で作られている事でした。フローリングはケンバス・机の天板はケヤキが代表的な使い方でしたが、使われている木材は全て先生自身が集められ、施工もご自身でしたと仰っていました。世界中の色々な樹種が適材適所に使われているのを、見ると嬉しく思いました。

先生との話は凄く盛り上がりました。午前10時から午後3時まで研究所を出る5時間余り木材の話で盛り上がりました。その話の中で服部商店の広葉樹原木の製材方法について先生に聞きました。

服部商店の広葉樹の製材方法は以下の通りです。

- 1、本木を見る。(曲がり)を見る事と芯が原木の中でどうなっているかを想像して曲がりを起こして台車に乗せる。
- 2、胴割りをする。木は成長過程で応力が発生する。それを最初に抜く事で、製材した板が真っ直ぐ出る。
- 3、原木の成長している年代を合わせて製材する。

先生は学問的に服部商店の製材方法は間違っていないと、言って頂きました。そして次回、服部商店が開催する勉強会(原木の製材)に呼んで下さいと言われ、喜んでお誘いしますとお約束してきました。

なお野村隆也京都大学元教授は何時もお世話になっている建築士の椎原先生のご紹介です。



野村研究室は無垢が豊富に使われています



スギで作られた椅子



雲スギで作られた木のおもちゃ



野村先生と服部雅章

## 第5回目の雅敏会

6月18日から6月19日の日程で和歌山県串本にスキューバダイビングに出掛けました。タイトルに雅敏会と書いてあるのは名前の服部雅章の雅と西村敏朗の敏を取って命名した二人だけが解る名称です。小生は52歳で彼は36歳で、職業も彼は特別養護老人ホームの事務局長です。年齢も職業も全く違う二人ですが、何となく馬が合い年1回の泊り込みのダイビングに出掛け、今年で5回目になります。彼は職員数約45名入所者約80名の大所帯で、毎日大小・良し悪し関係なく色んな事が起こるそうです。二人とも共通するのは、仕事のストレス解消方法はスキューバダイビングが一番合っていることです。又海を愛する心も職業が全く違っても一緒だと言うことです。

6月18日・19日は前々日の天気予報では、まずまずだと言う事で大阪を朝7時に出掛けたのですが、南に行けば行くほど天候は悪くなりました。しかし海は穏やかでした。確かに太陽光が海の中に差し込まない為、透明度はさほど良く有りませんでした、二人とも日頃のストレス解消は出来たと思います。



写真の左に写っているのは友人です。小生は泡のために顔は見えないですが記念の200本目のダイブでした。

私がダイビングを始めたきっかけは、今から10年前、当時はマージャン・競馬等の余り体に良くない遊びでストレス解消をしていたのですが、しかし本当にストレス解消には繋がりませんでした。そこで当時インターネットの急速な普及で色んな趣味のページを検索し、辿りついたのがスキューバダイビングでした。

初ダイブは2002年6月29日に福井県越前海岸に有るLOG前でした。生まれて初めてのダイブの感想は海の中ってこんなに冷たいものかと思った事を今でも覚えています。そして初ダイブから約1ヵ月後亡き父の体に不治の病と言われる、すい臓がんが発見され、亡くなった3月22日まで家族全員で父の為に過ごした事も鮮明に脳裏に有ります。

そして約1年の間隔が空き、二回目のダイブは2003年5月17日でした。そこでのダイブで完全にスキューバダイビングにはまりました。そして10年で200本に達しました。

海の中で何時も感じる事は、我々人間は多用な生物のお陰で生かされているので有って生きているのではないと言う事です。原発の問題で日本人の行き方・生活様式の見直しが言われていますが、まず我々人間は如何に上手く他の生物と共生しなければ生きていけない事を年頭に新しい東北地方での街作りを考えて実行して欲しいと思います。

海の中で何時も感じる事は、我々人間は多用な生物のお陰で生かされているので有って生きているのではないと言う事です。原発の問題で日本人の行き方・生活様式の見直しが言われていますが、まず我々人間は如何に上手く他の生物と共生しなければ生きていけない事を年頭に新しい東北地方での街作りを考えて実行して欲しいと思います。



クマドリカエルアンコウ



イカナゴの群れ



トウシマコケギンポウ

上の写真は小さな海の中の生物ですが、彼らと共に生きる事が出来るライフスタイルこそ新しい日本の本当の未来だと信じて、仕事に励もうと思います。